

最近イベントなどを除けば、田植えを人手で行うこともなくなってしまいました。友人には少年期に田植えをした経験があります。大人たちに交じって腰をかがめて行う作業は、忍耐を強いられるものでした。苗束から二三株ずつ苗を取り分けて、間隔を空けながら一列に植え付け、列が完成すると一歩下がって新たな列に植えていきます。代掻きで平坦になっていた田んぼには、自分たちの足跡が刻み込まれ、その水深は踏み込んだ分だけ深くなります。苗にも少なからずバラツキがあり、たまたま取り分けた短い苗がその深い部分に植え付けられると、苗の全身が水没しています。他の植物と違い、根が水中にあっても根腐れしないイネですが、水没してしまえば呼吸ができません。窒息してしまわないかと不安に思ったものですが、翌々日くらいには細い葉が水面上に伸びていました。水耕に適した進化をしているようです。



熱帯ジャポニカ

温帯ジャポニカ

昨年末のやよい塾「弥生時代の始まり」では、宮本先生が提唱されている“北部九州の農耕伝播の二重構造モデル”のお話がありました。夜田Ⅱ式(BC7～6世紀)の板付遺跡は、最古の灌漑施設の整備された水田遺構が出土した遺跡と言われていますが、それより古い夜田Ⅰ式(BC9～8世紀)の段階の菜畑遺跡に、初期水田が伝来しているようです。板付遺跡では、列島中に現在広く栽培されている温帯ジャポニカであったのに対して、菜畑遺跡では熱帯ジャポニカの栽培がされていたとのお話でした。

イネにはインディカ米と(温帯)ジャポニカ米があることはよく知られていますが、これとは別にジャワ島やアジアの熱帯地域などで栽培されているジャバニカ米と呼ばれる品種があります。ジャバニカ米は熱帯ジャポニカとも言われ、インディカやジャポニカと並列する表記がされることもあります。温帯ジャポニカ米とインディカ米が交

配して生まれたジャポニカ種の一つです。温帯ジャポニカが水耕に適したのに比べ、多様性があり水の少ない畑で栽培されることもあるようです。菜畑遺跡のような、水利管理が不十分な初期段階の水田で栽培されたのも、このような性質を持っていたからなのかも知れません。

出土鉄器の多さや青銅器の大量埋納など山陰の弥生集落には特色がありますが、他の地域がみな平均的だったわけではないようです。貝塚が形成されるほど大量・頻りに、わざわざ内陸の高所にまで、捨てるしかない貝殻を運び上げた謎が解明できなければ、瀬戸内の集落を理解できるとは言えないでしょう。大阪府立弥生博物館の図録より引用された「縄文時代と弥生時代の関係」には、稲作作りの文化が関東より先に東北北部の砂沢遺跡や、垂柳遺跡に伝わったことが示されています。中部や南関東よりはやく水田稲作が開始され、十数年で縄文生活に戻った謎もこの集落の大きな特色と言えるでしょう。

陸奥新報などの記事によれば出土したイネの分析から、垂柳遺跡からは熱帯ジャポニカに相当するDNAが見つかったそうです。寒冷な本州最北端の地に熱帯ジャポニカ米とは少し奇異に感じられますが、実は熱帯ジャポニカの方が環境変化に強く、ジャワ島などの品種とは異なった適応をしたのかも知れません。縄文時代に先行して日本に伝わった熱帯ジャポニカは、日本では必要な日照時間の関係で晩生となり、伊勢湾から東には進めませんでした。集約栽培である水田耕作に適する温帯ジャポニカが後から渡来し、晩生である熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカの晩生が交雑して早生(必要な日照時間が短い)が出現した結果、瞬く間に日本列島を北上することになった可能性もあるようです。

熱帯ジャポニカは身近にもあるようです。伊勢神宮(内宮)より2kmほど五十鈴川を降ったところに神宮神田があります。この神田では神宮にて1年を通して執り行われるお祭りで使用されるお米が育てられています。ところが平成元年は、二度に亘る台風に襲われて栽培していたコシヒカリはなぎ倒されてしまったそうです。ただ、倒れたイネの中ほどにコシヒカリとは異なる穂が2株のみ、倒れずに立っていたそうです。分析したところ、この稲は熱帯ジャポニカの遺伝子が含まれた新品種であると判定され、イセヒカリと名付けられて今では新田で栽培される5品種のイネの一つとなっています。

貝塚ができるほどに穀ごと貝を内陸の高所に運び揚げた瀬戸内の集落や、水耕稲作を試しながら、また縄文のくらしに戻った本州最北端の集落など、各地の集落はバラエティに富んでいます。稲作文化も、どの品種をどう耕作し、どのように混ぜ合い形成されたかは、ずっとずっと重層的で複雑に絡み合った過程を経ているのではないのでしょうか。